



本書は、「正解がないよね」「合意は難しいのでは?」と思われがちな、倫理的問題でジレンマに悩んでいる方々に向けて、対話による合意形成の可能性を伝える1冊である。事例を読むと、自分がその場の関係者であるかのように状況がリアルに伝わってきて、事例の分析やアプローチを読み進めるうちに著者への共感が湧いてくる。

著者は、助産師、保健師、看護師の資格をもって病院や地域で活動するなかで、自己決定が必要な場面で意思表示できなかった/できた患者とその家族、医療従事者と関わってきた。これらの体験を通して医療の場から視野を広げつつ、大学院博士課程で社会的合意形成について学びながらこの課題に正面から取り組み、「合意の原則」を提案されている。私はそのことに非常に興味を抱いた。

医療の場でジレンマに悩むすべての人へ

【評者】

中尾久子

九州大学大学院医学研究院保健学部門

医療倫理と合意形成

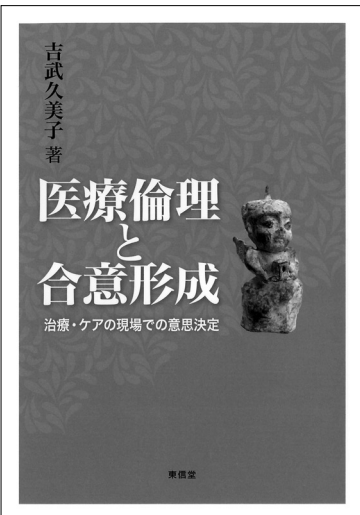
治療・ケアの現場での意思決定

吉武久美子／著

A5判・248頁・2007年発行

定価2,940円(定価2,800円+税5%)

東信堂(Tel: 03-3818-5521)



さて、本論である。本書は、序章と終章を除き、9章から構成されている。

第1、2章では、患者の治療とケアの決定の分離、医療従事者間の意見の相違、科学的根拠の重視により患者の意思を見落とす可能性が論じられ、第3～5章では、インフォームドコンセントの導入による「患者の自律」とその問題、患者-医療従事者間のコミュニケーションの課題とコミュニケーションのあり方、主治医/患者中心のチーム医療と意思決定に至る関係者の役割の違いについて述べられている。

私が特に関心をもったのは第7、8章で、7章では医療現場での意思決定の課題に応えるためには「合意の原則」が必要で、「自律の原則」から「合意の原則」への転換の必要性があること、そして8章では合意形成の具体的なプロセスが述べられている。

医療現場では、インフォームドコンセントが推進され、倫理原則の「自律の原則」は、人格論に基づき、判断能力をもった人間の自己決定権を重視している。しかし、病んで他者に依存が不可欠な状況下では、ひとりで自己決定を行なうことは難しい。他者との関係性のなかでの判断だからこそ、関係者の意見の理由を知り、合意形成することが重要だと著者は主張する。

とはいえ、合意形成は簡単ではない。関係者の価値観が異なる状況での議論は、ともすれば対立する。著者は、合意形成のプロセスについてもその進行の仕方やそのなかで果たされるべき役割を具体的に述べている。合意形成のプロセスにおける進行役として、医療知識と責任感を持ち、コミュニケーション能力や企画力、調整能力を有する看護職の出現は、まさに望まれているところである。

私は本書を、医療・保健・福祉の場で働いていて倫理的ジレンマに悩む方々と、倫理的問題に関心のある学生・院生、そして教育関係者に強くお勧めしたい。それは、病んで他者に依存する患者の意思を尊重し、関係者が納得できる決定に必要な「対話と合意」に極めて重要な意味をもつメッセージが、本書の随所に込められているからである。